

---

# 僕らの方程式

紗々

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

僕らの方程式

### 【Zコード】

N4754M

### 【作者名】

紗々

### 【あらすじ】

「僕」と「彼女」のフリートーク集。

各話完結式です。

「初雪つて…おかしいと思わない?」

1月も半ば、窓ガラスを凝視したまま彼女が言つた。やはり眉間に皺が寄つてゐる。一方僕は彼女がそんなことを言い出した訳も知つてゐる。今、その視線の先ではアルミサッシの枠の中に雪が舞つてゐるのだ。

「君がそんなコト気にするタイプだとは知らなかつたよ  
ますます彼女の眉間の皺が深くなる。

「気になんかしてないわよ。だからおかしいって言つてるでしょ」  
おかしいと思うことは気になる内に入らないんだろうか。心の中でツツコミをいれながら僕は読みかけの小説に視線を戻す。反論する訳にはいかない。僕の大切な昼下がりの読書時間を邪魔されてなるものか。しかし彼女はそんな僕の態度に構わず質問を続ける。  
「だつてその年で一番最初に降る雪のことでしょ?」

「そりなんだ」

すかさず彼女の左手が百人一首の達人の如く僕の視界から本をすつとばし、同時に僕はその右手に耳から引っ張りあげられた。

「…ぼうりょくはんたーい」

「もうちょっと真面目に考えてよ」

彼女は尖つた声で言い放つとパッと手を離し、元の姿勢に直る。僕も痛む耳を摩り、飛ばされた本を拾つて椅子に座り直した。今朝購入したばかりのハードカバー本は角がひしやげて、20ページほどまとめて折り目がついてしまつていて。果たしてその論題に、こんな目に遭つてまで真剣になるほどの価値があるんだろうか。甚だ疑問だ。

しかも彼女は何事もなかつたかのように話を続ける。

「でもそれは人間が1年つて概念を作つたからであつて、自然界から見れば初でもなんでもないわけじゃない」

「そういう文句は僕じゃなくて最初に初雪つて言葉を開発した人に  
言つてほしいな」

「言いたくても言えないから此處でぶちまけてるんじゃない」

「こもつとも。僕はページの折目を直し、読んでいた箇所を広げた。が、3行読んだところで閉じた。今のですつかり気が削がれて全く頭に入つてこない。仕方ない、気が済むまで付き合つてやるか。諦めて彼女に新しい問題を提示する。

「それじゃあ君の考えだと、初夢もおかしいことになるのかな」「そうね」

彼女は短く答え、少しの間思案した。

「夢は必ず毎日見るモノだもの。今のように時間の概念ができる前の人間だつて見ていたはずだし、その彼等は初夢を初夢と意識していなかつたでしょうしね。同じ人間なのに現代人が気にするのは不平等だわ」

何が不平等なのだろう。それより個人的な趣味の時間を奪われた僕にもその気持ちを一滴でいいから分けてほしい…と思つた時、彼女はついとこちらを向いた。

「そもそも夢は生体的な反応の一つなわけだから、人体のしくみから考えれば生まれて最初に見た夢のみを初夢と呼ぶべきよ」

そんなの覚えてる訳ないだろう。そう思いながら彼女の愛らしくつきでた唇に目が行く。彼女のそれはふつくらしているとは言えないが、とても綺麗な形をしている。

「ファーストキスは?」

不意に口をついて出た質問に、彼女はちょっと口を尖らせる。彼女の唇はこの癖のおかげで柔軟性を忘れてしまったに違いないと思つた。

「私は初雪や初夢が毎年あるのがおかしいと言つてるの。それは人生に一度きりじゃない」

「なるほど」

彼女はふうっと溜め息をつく。まだまだ語り足りない様子だ。

「じゃあ初詣は？毎年やるものじゃないか」

「それは人間が勝手に決めて勝手にやつてるだけじゃない。神様なんて所詮人間の妄想の産物よ」

ここまで言われるといつそ清々しいな。

「じゃあ君は初詣に行かないの？」

「愚問ね」

「他の行事も興味がないんだ？小さい頃七夕とかやらなかつた？」

「覚えてないわ」

思想の自由が法律で定められている国とはいえここまで極端な人も珍しい。ということは…

「クリスマスも然り」

先を越された。

彼女は席を立ち、珈琲をいれはじめた。それに砂糖をどばどばと放り込む。無論、どちらも彼女ではなく僕がセールで購入したモノである。彼女は激甘珈琲を手に席に戻り、先程までとは逆の足を組んだ。ショートパンツの裾から白い太股が露になる。僕は頬杖をつき、そこから皿を反らすこともしないまま話を続けた。

「クリスマスはアイツと過ごしたんじゃないの？」

キッと睨まれた。

「まさか。アイツもバイトだつたし」

アイツとは僕の唯一の大学友達にして彼女の彼氏を努めるつわもの君のことだ。健康的で爽やかなスポーツ青年である彼がこの彼女と一人きりの時何を話すのか、大学2年が終わるうとしている今に至るまで謎のままである。

誤解しないで頂きたいが僕と彼女は恋人同士なんかでは断じてない。あくまで『友達の彼女』と『彼氏の友達』という繋がりなのだ。なのにも関わらず、奇異なことに彼女は、僕が根城にしているこの空き部室に度々現れ、僕の至福の時間をぶち壊すべく様々な理論を展開する。勿論アイツの了承は得ている。

しかしアイツ、クリスマスは彼女と過ごすからバイトは入れない

とか言つてなかつたか？彼女のこの様子だとはぐらかされたかすつぽかされたかしたのか。憐れな。

「大体何が楽しくてよその国の神様まで祝つてあげなきやなんないのよ。誰よ、どこぞのオッサンの誕生日を恋人達の思い出づくりに利用しようと考えたバカは」

オッサンってキリストのことだらうか。ずいぶん酷い言われようだ。しかしちよつと待て。それはどちらかと言えば独り身の僕みたいな奴がひがんで言つべき台詞ではなかろうか。

彼女は珈琲を口に含み、無表情にカツプの内側を見つめていた。果たしてあの砂糖の量は彼女にとつて適量だつたのか、その表情からはさつぱり読み取れなかつた。

「それよりさつきから個人的に気になることがあるんだけど」

僕が言うと、彼女は睨みつけてきた。しかめつちらしても顔のバランスが整つてゐる。妙な迫力がある。そんな事を考えながら、僕は今までの時間を水泡に帰すべく爆弾を投下する。

「初雪つて年初めだつけ？」

「どういうこと」

「その冬初めての雪を初雪つて言つのかと思つてた」

彼女がキヨトンとする。

窓の外では雪が地面に薄い絨毯を敷きはじめていた。

## 休日で遊ぶ休日（福島県）

2009年のカレンダーを参照してください。

## 休日に論ずる休日

「振替休日つてどうこう」と

憤然として彼女は言った。5月の陽射しが机に反射し、彼女の顔面に陰影をつくる。

「どうもこうも」僕は一度彼女を見、また本の上に視線を戻す。

「世間は休日、大学も休講

「それはさつき聞いたわ」

彼女は君が言ったんでしょう、と言わんばかりにビツと僕を指差す。

彼女が例によつてこの空き部室に現れたのはつい先程のことだ。扉を開けるなり「どうして誰もいないの?」と宣つた。どうやら通常通り授業があるものと思っていたようだ。そこで僕は今日が振替休日で休講である旨を簡潔に伝えた。

「何がどうして振り替えた訳?」

何がそんなに不満なのか、口を尖らせ彼女が言つ。僕は仕方なく読みかけの本を閉じ、姿勢を正した。わざとらしく咳払いなんかもしてみる。

「いいかい、今年の『みどりの日』は日曜日だつたんだ。だから今日はその代わりだ」僕が小学生に教えるようにゆっくり優しく簡潔に言つと、案の定彼女は眉間に皺をよせ、嫌悪感を露にした。

「そこまでして休みをとる必要があるの?」

確かに、今年は4月の『昭和の日』から丸々一週間がゴールデンウィークだつた。僕らの学び舎たる大学が休みに挟まれて、といつだけで何の休日でもない30日と1日まで休講にしてしまつたからだ。長すぎるにも程がある。余りの長さに何をするのが最も有意義なのか計りかね、途方に暮れているうちに何もしないまま休暇を終えようとしている僕の気持ちも考えてほし。

しかし。

「いいかい、日本では一年間にこれだけ休まなければいけない、と法律で定められているんだ。『国民の祝日に関する法律』といつ」

「はあ「彼女が気のない返事を返していくる。

「それには祝日が日曜日と重なった場合、翌日の月曜日が代わりに休日になることが定められている」

「へえ

相槌を打つてはいるものの、彼女は相変わらずじつと僕を見る。いつの間にか向かいにあるパイプ椅子に腰を落ち着け、興味はないけど聞いてあげようかしら、といつ様子で頬杖をついている。

「ただ、去年と今年の『ゴールデンウィークは異例で、連休の最初が日曜日になってしまったから、水曜日に振替休日が来て、土曜日から数えて5連休になってしまったと」

「ふうん」

演説を終えても、彼女は一向に納得しないようだ。僕は溜め息をついた。

「いいじやないか、休みが多くても、授業に縛られず好きなコトで起きるし」

「君は授業があらうとなかろうと此処でサボつてゐるじゃないの」

「ごもつとも。

「法律だかなんだか知らないけれど、そんなに休みばつかとつてるから学力低下だの日本の未来が危ないだのと言われてるんじゃないの」

青春を謳歌しているはずの女子大生が、連休一つで斯様なことを憂いでいるとは嘆かわしい。

「いつからそんな愛国主義者になつたんだ?もう少し女子大生らしい発想を持ちなよ」

「そういうことは男子学生らしい生活リズムを整えてから言ひなさい」

ひしゃつと言ひ返された。今、日本中の引きこもつを敵に回した

な。

僕は椅子の背もたれに身を預けた。パイプ椅子の間接が軋む。  
「休みが多いほどアイツと遊ぶ機会だつて増えるんじやない？ 何が不満なのさ」

アイツとは言わずもがな、僕の大学での唯一の友人でもある彼女の彼のことだ。ところが彼女は心底いぶかしげに目を細めた。  
「何の為に？」

「は？」

「何の為にアイツと一人で連休を過ごさなきやならないの。何のメリットが有るわけ？」

ちょっと待て、君たちはデートのひとつもしないのか？ 僕はぽかんと口を開けた。それこそ何の為に付き合つてるんだ。

「よくわからないけれど、それが彼氏彼女つてモノじやないの？」  
「誰がそんなコト決めたのよ」確かにそこまでは法律も縛つたりはしないけれど。

「少なくとも毎日会う必要はないもの」

あ、そういうことか。どうやら全くデートしない訳ではないらしい。僕は改めてまじまじと彼女を見る。不満に顔を歪めても尚整つた顔立ち。今日は少し早い真夏日の為か、胸元の開いたシャツにミニスカートという出で立ちだ。ほつそりとした手足。アイツはよく彼女をモノにできたもんだと感心してしまう。

これで笑顔を見せるようになれば振り返らない男はいないだろうに、と思う。僕は未だに彼女の笑う顔を見たことがない。

「けれど意外だね、君はそんなに学校が好きだつたの？」

笑顔と同様に、僕以外の誰かと話すのも見たことがない。人のことは言えないが、ちゃんと友達がいるのか常々心配していたのだけれど。

彼女はいつもの様につん、と口を尖らせ、窓の外を見た。

「別に」

「じゃあ何が不満なのさ」

「用もなく学校に来てしまつたことで浪費された時間の虚しさを嘆いているのよ」

確かに無駄足もいとこりだ。ミニスカートの裾から覗く彼女の白い足を見て、あながち無駄な足でもないよ、と言いつつなる。これら。

「でも、此処で僕と話してこの方が時間を無駄にしてる気がするのだけど」

彼女ははた、と伏せていた手をあげた。同時に窓の外で青葉が落ちていくのが見えた。

「話し相手になつてあげたのよ」

心なしかさつきより険しい仮面を作つて彼女は言つ。

「君の為にわざわざ時間を無駄にしてあげたの。感謝してほしいものね」

吐き捨てるように言い切ると、がたんと音をたてて立ち上がる。くるりと背を向け、足音高く部屋を出た。あつといつ間だった。

10

扉を閉める直前、彼女は振り返つた。

「ところで君はどうして居る訳?」

「此処は僕の部屋であるも同然だからね」

僕は事も無げに言つた。

「此処に持ち込んである本で、どうしても読みたいのがあつたんだ」  
彼女は一瞬、疑わしげに目を細めた。が、「ふうん」と言つて扉をぴしゃんと閉めた。

僕は彼女の足音が遠ざかるのを確かめてから、ほつと胸をなでおろす。  
だって、まさか言えないじゃないか。

「虫つて可哀相だと思わない?」

彼女はぼんやりと壁を見つめながら言つた。

7月も下旬、大学は試験期間に入つていた。生憎中庭には「羽二ワトリはいな」ようだけれど、代わりに無数の学生が二ワトリよろしく右往左往している。試験なんて余裕だから、と私用に急ぐ学生もいれば、なんとか単位を落とさないよう教授と同級生との間を奔走している（よう見える）学生もいる。

僕はと言えば、もともと少なかつたテストが午前中で終わり、午後も特に予定がない。帰宅しても構わないけれど、屋外は気温32度の真夏日。どうせ涼むなら大学の電力を思う存分浪費してやるつ、という魂胆でいつもの空き部室にいつものように読書しようとしたところである。

しかしそこには先客がいた。

「人間には嫌われるし他の動物には食べられちゃうし」

本棚前のパイプ椅子に座つた彼女が続ける。机に頬杖をつき、優雅に脚を組んでいる。窓はきつちり閉められ、真正面に位置するエアコンの風が彼女の前髪を揺らす。

僕は彼女の言葉には答えず、遠慮がちに言つてみた。

「……そこは僕の特等席なんだけれど……」

「他の動物はまだいいわよ」

華麗にシカトされた。

「……あのさ、」

「自然界は弱肉強食だもの。だけどね、」彼女の語り口は淡々としてはいるが、心なしかヒートアップしてきている。

「嫌悪感とか好奇心とかで彼らを侮辱するのは人間だけなのよ」そこまで言つてから、彼女はキッと僕を睨んだ。

「それってどうなの」

「そこまで人の話を聞くこゝとしないのつてどうなの」  
僕は諦めて扉側のパイプ椅子に座つた。ここまで来たら彼女の話を聞くしかなさそうだ。

「君が言いたいことはよくわかるよ」

「じゃあどうして冷たいお茶の一つも出して貰えないのかしら」「おいおい、と思わず僕は心の中で、彼女の彼氏である僕の唯一の友人に問い合わせた。君は一体彼女の何処を好きになつたんだい。

溜息をついて冷蔵庫から冷えた烏龍茶を出し、グラスに注いで彼女の前に置いた。けれど彼女はそれを飲もうとはせず、腕を組んでじつと睨みつけている。

そのまま何も言わないので、烏龍茶を一口飲んで、僕の方から話の続きを切り出すことにした。

「確かに僕たち人間の虫に対する仕打ちは酷いかもしれない。虫嫌いの田に止まれば問答無用で殺されるし」

彼女は強く頷く。

「研究家や子供の田に止まれば実験台にされたり観察されたりするしね」「虫を糺つているものと決め付けて、『虫けら』なんて表現を生み出す」

「そう」

「虫だつてただ一生懸命に生きてこるだけなのに」

「そうよ、そうなのよ」

一体僕らはいつの間に昆虫擁護論者になつたのか。

烏龍茶の氷が思い出したようにカラーンと音をたてた。相変わらず彼女には口をつける気配はない。

「害があるモノはともかく、私達はどうして彼らを嫌悪するのかしら?」

僕が質問を理解できず黙つていると、彼女は呆れたよう僕を一瞥して言い直した。

「どうして彼らに対しても『気持ち悪い』って思つたりするのかし

「ら

「神様がそう創ったから」

「…私、貴方のそういうところ嫌いよ」

「それは光栄だね」

彼女はまた顔を正面のエアコンに向けた。今日はノースリーブのパークーを着ている。夏なのに真っ白な腕と華奢な肩があまりに涼しげに見え、逆に心配になつて寒くないか、と尋ねると無言でかぶりを振つた。

「誰か一人でも、そこにいるだけで嫌悪される彼らの気持ちを考えたことがある?」 僕は先程から、彼女が『彼ら』という言葉を選んで使つていていることを興味深く感じていた。彼女は虫をあくまで自分達と対等の立場で扱つているのだ。

「少なくとも今、君が考へてくれているじゃないか」

「例えればこれが人間だつたら、多くの人は同情したりするのよ。人間が殺されたら犯人に対して憤つたりするのに、自分が踏み付けて虫にも遺族がいるかもしないなんて夢にも思わないのよ」

「…そこまで考へて生きいたら疲れそうだけれど」

僕は彼女の凜とした横顔に見とれた。それは確かに綺麗だつたけれど、畏れを感じさせる類のものだつた。彼女の崇高な考へは素晴らしきけれど、少し異常に思える。

それは人間という生き物の傲慢に過ぎないのではないか。虫はきっと生きていくのに精一杯で、人間のように余計なことを考へるヒマなんてないのではないか。

それともそういう考へこそが傲慢なのだろうか。

余計なことを考へていたら訳がわからなくなつてきたので止めた。代わりに彼女に言つた。

「理不尽な理由で命を奪われるはどんな生き物であれ同じだよ。虫も哺乳類も人類も平等にね」

彼女は僅かに目を見開いて僕を見た。前に何度か見た、まだどうけなさを残した表情で、まるで僕がここにいることに初めて気が付

いたよ」。

「ああ、そうか、と思った。あいつは彼女のこうこうぶりを好きになつたのかかもしれない。

「…そうね」彼女はまた視線を烏龍茶に戻した。

「大切なのは命の尊さを忘れないことよね」

「一体いつの間にこんな重く恥ずかしい話題になつたのか。

そこでチャイムが鳴り、休み時間の終了を告げた。僕が現実に引き戻されると同時に読書時間の喪失を嘆いているのも意に介さず、彼女は「帰る」と一言告げて立ち上がった。結局烏龍茶はびっしり汗をかいたまま、手をつけられることはなかつた。

その時。

机上に濁音で始まる焦げ茶色の虫が、どこからともなくカサコンと現れた。

僕が「あ」と言つ前に彼女が動いた。パーンと小気味の良い音が響き、次に机を見ると虫は平たくなつていた。彼女の手にはいつの間にか筒状に丸めたノートが握られている。

「…なんで？」僕が問うと彼女は顔を歪めた。

「だって、気持ち悪いじゃない」

さいですか、と僕は思つた。多分、ここでそのノートは僕のだと言つても聞き入れてくれないんだろうな。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4754m/>

---

僕らの方程式

2010年10月17日02時30分発行